【264】

氏 名（本 籍） 坂田 由美子（さかた ゆみこ）（熊本県）

学位の種類 博 士（医 学）

学位記番号 博 甲 第 2972 号

学位授与年月日 平成14年3月25日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

審査研究科 医学研究科

学位論文題目 在宅痴呆介護者の健康問題に関する研究
－在宅介護時の24時間血圧・心拍数・心拍変動の評価を中心として－

主 査	筑波大学教授	博士（医学）	大久保 一 郎
副 査	筑波大学助教授	博士（医学）	渡 辺 重 行
副 査	筑波大学講師	博士（医学）	江 守 陽 子
副 査	筑波大学講師	医学博士	谷 川 武

論 文 の 内 容 の 要 旨

（目的）

介護が身体に与える影響を生理学的に測定した研究は少なく，介護が及ぼす身体負荷の実態は未だ明らかにされていない。本研究では，介護による身体負荷が介護者に及ぼしている影響を明らかにすることを目的とし，①東京都Ｔ区における老人福祉手当受給者の中の痴呆性高齢者とその介護者の実態を検討し，②介護による身体負荷の影響について，24時間血圧・心拍を用いて検討を行った。

（対象と方法）

対象として，研究①では東京都Ｔ区で平成10・11年度に痴呆が主原因で老人福祉手当を受給した高齢者133人とその介護者133人とした。研究②では，要介護者が短期入所生活介護，短期入所療養介護，通所介護，通所リハビリテーションのいずれか１つでも利用している，東京都Ｔ区に居住する介護者481人のうち，協力が得られそうな介護者155人に対して協力依頼を行い，同意が得られた30人を対象とした。

方法としては，研究①では老人福祉手当申請書及び相談記録票からデータを収集し分析した。研究②では介護者の自宅で質問紙を用いた訪問調査と24時間血圧・心拍測定を行い，24時間平均血圧，起床時血圧，覚醒時・睡眠時平均血圧，就寝時血圧，血圧の変動係数を求めた。心拍のRR間隔データは，周波数帯域をlow frequency（0.05－0.15Hz；LF），high frequency（0.15－0.40Hz；HF）に分けてスペクトル解析を行った。そして介護時間，介護負担感，介護度などの介護者・要介護者側要因を２群にわけ，血圧値等を共分散分析により比較した。

（結果）

研究①では痴呆性高齢者133人の平均年齢は83歳で，常時見守りや介護が必要な高齢者は87%，問題行動は記憶障害，失禁，失見当識，徘徊の順に多く，自立度が低いADLは排泄であった。介護者は86%が女性で，嫁，娘が多かった。窓口での相談内容は，福祉手当申請以外ではディケア・デイサービスの利用希望やホームの入所希望が多かった。

研究②では分析対象はデータが得られた27人のうち，女性のみ24人（平均年齢63歳）とした。要介護者の介護度が重度の介護者は軽度の介護者よりも，１日平均最大血圧値，昼間平均最大血圧値，夜間平均最大血圧値が

高く，１日平均最大血圧，昼間平均最大血圧の変動も大きかった。介護の代替者がいない介護者はいる介護者よりも，起床時最大・最小血圧値が高かった。介護度が重度で介護代替者なし群は，介護度が軽度で介護代替者あり群に比べ，１日平均最大血圧値，昼間平均最大血圧値，LF/HF 値が高かった。

要介護者がショートステイ利用時と在宅時で比較した結果では，血圧値，心拍数の平均値では有意差は認められなかったが，心拍変動では介護を要する日は要しない日に比べ HF が低く，LF/HF 値が高かった。

（考察）

研究①では要介護者の年齢分布と介護者の続柄から，介護者の年齢は50歳代以上の女性が多いことが推測された。女性介護者は介護以外にも家事等の役割があるため，24時間家庭に拘束されることが多く，ストレスの増大が推察される。さらに，デイケアの利用やホーム入所についての相談があったことは，介護の負担から少しでも離れたいという介護者の気持ちの表れとも考えられ，在宅での介護が介護者に負担を与えていることが窺われた。

研究②では，24時間最大血圧の平均値は要介護者の重症度と関連することが示された。さらに介護度が重度で介護代替者がいないことも，24時間最大血圧の平均値と関連していた。したがって，これらの介護要因は，血圧値の変動性からも，介護者にとって将来の心血管系疾患の危険因子となりうる可能性が示された。また介護度が重度で介護代替者がいない群は，介護度が軽度で介護代替者がいる群に比べて，副交感神経活動が抑制され，交感神経が活性化されて，血圧値が上昇することが示された。さらに介護者は要介護者がいることで緊張状態であることが窺われた。

審査の結果の要旨

在宅における痴呆性高齢者を日常的に介護する者の介護による身体的な負担を24時間血圧・心拍測定を行い，生理学的に測定した独創的な研究である。その結果として，介護者の血圧上昇因子として，要介護者の重症度，介護代替者がいないことが示唆された。本結果を一般化するには対象者数が十分ではないが，介護者自身の高齢化が進むにつれて，脳血管疾患の発症リスクが高まることからも，介護者の身体的な負担を軽減するための健康管理面からの対応や行政上の対策の必要性が示されたことは，公衆衛生上意義のある研究として評価される。

よって，著者は博士（医学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。